



中学1年生の皆さん、入学おめでとうございます。「グローバル通信」をお届けします。

「グローバル通信」は昨年から刊行を始め、不定期ながら1年間で16号まで出すことができました。内容は教育の問題、世界に飛び立った先輩からのメッセージ、在学生の国際交流活動など様々な分野にわたります。生徒諸君に限らず保護者の方々も是非お読み下さい。バックナンバーは、本校ホームページの「グローバル教育部」で読むことができます。

さて、2015年度第1号は、昨年来モンゴルとの交流を深めている数学科主任川崎先生の寄稿。そして、3月に実施した「地球村」の記録です。

## 新モンゴル高校卒業在日本留学生の集い・参加の記

海城中高数学科主任 グローバル教育部 川崎真澄

### §1. 今日のモンゴルの生活事情

3月28日に、一橋大学小平国際キャンパスにて、モンゴル国ウランバートル市にある私立新モンゴル高校の卒業生で、現在日本へ留学している同窓生の集いが、約80人の参加者により行われ、その集いへご招待を受け、参加してまいりました。

これは、昨年来、開始されている同校と本校の数学科間交流のご縁によるものです。

詳細は、本校グローバル通信の第3号～第4号をご参照ください；

第3号 [http://www.kaijo.ed.jp/document/global\\_communication\\_vol3.pdf](http://www.kaijo.ed.jp/document/global_communication_vol3.pdf)

第4号 [http://www.kaijo.ed.jp/document/global\\_communication\\_vol4.pdf](http://www.kaijo.ed.jp/document/global_communication_vol4.pdf)

この集いでは、まず、同校のナランバヤル校長先生(国際政治学博士)による、「モンゴル、日本、アメリカ、ブータン、中国の生活習慣の差異について」の講演がありました。これは、とりわけこの4月から日本の大学生となる留学生諸氏へ有益なものとなったことでしょう。



(中央=川崎、右=ナランバヤル校長先生) ちな遊牧民の国モンゴルというイメージが崩れつつあり、わけてもこれまでのモンゴルにおいて重用されてきた祖母の不在がもたらす諸問題が報告されました。

「都市化と、人間同士の触れ合いの温かさ、例えばブータン王国の誇る高い幸福度の両立はできるか？」との同校長先生の問いに対し、参加者が積極的に提言をしたのが印象的でした。

### §2. 日本は水に流し、モンゴルは火で消す

また、トラブルを「水に流す」ことで収束させる我が国に対し、モンゴルでは、その場合、「火を消す」という表現を使うとのこと。なにか日モの文化の差異を読み解く大きな鍵を得た思いがしてなりません。さらに、女性留学生氏曰く、モンゴル男性へは「あなたは狼ですね」という献辞が最上級のものとされるとのこと。これは実に興味深いもので、感心していると、「但し、赤ずきんちゃんに出てくるような悪い狼のことではないですからね」と微笑まれました(皆さ

ん、日本語が堪能で、表現や比喩が巧みなことに驚きます)。

講演終了後、パーティーとなり、留学生諸氏による「ツイワン」(モンゴル式焼うどん)、「フウシュウ」(モンゴル式ミートパイ)といった心づくしのモンゴル料理に舌鼓をうちつつ、同校長先生と十ヶ月ぶりの再会を喜び、旧交を温めました。なお、料理名はCHINBAT MUNGUNZAYAさんに教えて頂きました。モンゴルの代表的な家庭料理とのことです。

背後から「先生！」と声を掛けられ振り向けば、昨年の今頃、新モンゴル高校の日本の合宿所(千葉県長生郡)を訪ねた際、大いに談論風発した留学生諸氏が並んでいました。



あの時、初対面にもかかわらず、料理と歌で私をもてなしてくださった彼、彼女らを忘れようはずもなく、熱く語ってくれた将来の夢について聞いてみると、「よく覚えていてくださいましたね！」と感激され、各々の近況を伝えてくれました。目の輝きは1年経って、さらに増すばかりでした。

### §3. 礼儀正しい国民性を垣間見る

会はいよいよ佳境を迎え、ガルバドラッハ同校理事長先生(教育学博士)より、この度開学15周年を迎える同校についてのビッグプランが発表され、会場の氣勢が大いにあがるなか、馬頭琴の演奏やモンゴル古典舞踊の披露がされました。

また、招待客によるスピーチもあり、なかでも昨年行われた同校のサマーキャンプにボランティアとして参加し、同校の生徒たちとの触れ合いに心動かされ、今年度から同校の日本語教師としてウランバートルに渡るといふ女子大生氏のそれは会場全体に感動をよび、万雷の拍手が暫し鳴りやみませんでした。

この日はモンゴル国営テレビのクルーが取材に訪れており、この集いの模様が近々放映されるそうです。

いかに、同国にあって同校が注目されているかが分かりますというものです。

集いはまだまだ続いていましたが、そろそろモンゴルの方同士「水入らず」で過ごされる時間と思い、ナランバヤル校長先生にご挨拶して静かに会場を後にしたところ、今日が初対面の数人の留学生諸氏が駆け寄って来られ、「今日はお忙しいところをお越しくださってどうもありがとうございました」と丁寧なご挨拶を頂き、当方も丁寧に謝辞を述べました。

尚、校長先生や理事長先生のご講演はすべてモンゴル語(ご両所は日本語が堪能ですが、留学生の集いゆえ、モンゴル語で行われました)でしたが、私が席に着くやいなや、留学生の何人かがすかさず講演内容の通訳を買ってでてくださいましたため講演内容が把握できました。

モンゴル人はおしなべて実直で礼儀正しいと言われますが、上記のエピソードにてそれを垣間見て頂ければ幸いです。

「モンゴルの人口がせめて1000万人だったら(現在は300万人。半数がウランバートルに集中している)その国民性もあって国力の更なる増進が加速するはずなのに…」との私のつぶやきに、「いや、300万人だからこそ、この新モンゴル高校の彼、彼女らが貴重な存在としてス



ポットライトが当たるとも言えるのではないだろうか」とは、同校の日本事務局局長村上徹也氏の言であり、なるほど同国の実情を熟知している方だからこそその至言に思われました。

最後に、本校と新モンゴル高校の数学科間の共同事業第一弾は、Skype による度重なる会議等によっていよいよ佳境を迎えております。こちらの方は、本校数学科のHPのなかにございます「数学科だより」(<http://www.kaijo.ed.jp/education/subjects/mathematics/>)にてご報告いたします。

新モンゴル高校の皆様、このたびはご招待、まことにありがとうございました。皆様の学業のご成功を心からお祈り申し上げます。

## 「地球村」報告

グローバル通信で参加を呼びかけていた「新教育プログラム 地球村」が無事終了しました。参加生徒は、中学1年6人、中学2年1人、中学3年8人、高校1年2人、合計17人でした。参加者数が少なかったために経費の一部を海城中学高等学校後援会に援助していただきました。ありがとうございました。少人数でしたがとても内容の濃い、有意義な3日間を過ごすことができました。ここに実施プログラムの概要を紹介します。



〈第1日〉

○グローバル時代に生きることの意義を学ぶ

global と international の違いとは？

○グローバル視点とは何か

物事を一方向からのみ見るのではなく、俯瞰的にしかも正反対の価値を持つ2軸を使って best mix を求める。

○セヴァン・スズキのスピーチから学ぶ

1992年リオ・デ・ジャネイロで開催された「環境サミット」における12歳のカナダ人少女のスピーチから、人の心をとらえるスピーチ法を学ぶ。

○地球の大きさを測った古代ギリシャの男、エラトステネス  
情報収集と分析の重要性を学ぶ

○文化の世界地図

Legal Code、Moral Code、Religious Code、文化が違えばルールも違う、それぞれの多様な人たちの心の構図を読み解く。

○日本の固有な価値についての討論

〈2日目〉

○スピーチのテーマ選び

1年A君「エボラ出血熱」 3年B君「戦争が起きる理由」など

○絹の道

ユーラシアの重層的な理解。

○日本人・キリスト教の人・イスラム教の人が協力して木・金・土の3日間で橋を作る

宗教によっては、働けない曜日や時間帯があることがポイント。さて、どうやって橋を架けるか。 (新聞紙で作った橋→)



○スピーチ練習

○人種差別といじめのない「地球村のルール」を作る

生徒が討論の末作った5箇条のルール

- 1 地球上に住むすべての人を地球家族とする。家族間での殺し合い、暴力行為、威嚇をしない。
- 2 地球家族内では愛し合い、自身で変えることのできない身体的及び思想・性格などの精神的差違によっていじめ、差別することを禁止する。
- 3 我々一人一人は全地球家族のメンバーとして、法律の下で、他の思考を弾圧することがない教育が行われることを義務とする。また我々一人一人は全地球家族として、すべての異なる思想への理解を促す教育が行われるようにする。
- 4 地球家族の次世代の子供のワクワク、希望、夢を作り出すために責任を持つ。
- 5 文化の根源である人類の※アイデオシティを継承、尊重、創造し、未来を改善していくことを地球家族全体に義務づける。

※思想 (idea) と存在意義 (identify)

〈3日目〉

○スピーチ練習

○ヤングサミットの開催

一人一人が自分で設定したテーマで3分間スピーチ

〔参加生徒の振り返りより〕

紙幅の関係で、数人の感想のみ掲載します。

「一番インパクトのあったこと」

**1年C君**—セヴァン・スズキのスピーチが一番強烈なインパクトがあった。自分が12歳のころも、人前で話すことを何回もしたが、足がふるえ、声が裏返り、頭の中が真っ白になってしまうほどだったのに、セヴァンはそんな素振りも見せず、堂々と話していた。今回で多少自信がついたものの、まだ国連の前で話すような勇気はない。しかし、いつかは話せるように日々努力していこうと思う。

**3年D君**—知識 (information) から知能 (intelligence) に転換すること、自国の文化を学ぶことの大切さです。いままでの学校学習、いわゆる知識詰め込みに疑問を感じていた自分ではあったが、知識も集めれば、世界を動かすことのできる力になることを知りました。また、世界を旅したことで今までよりもずっと自国の文化の素晴らしい点に気づくことができました。グローバルで生きるのに英語能力が必要なのは分かるが、それ以前に自国について他の人に教え、意志を説明できる素晴らしさを知った。

「グローバル人材になるために、明日からあなたはなにをしますか」

**3年E君**—まず俯瞰視点を持つ、ということ。これは社会問題だけではなく、日頃の悩みなどにも応用できると思う。次に、問題を自分のこととしてとらえ、自分が取るべき(取ることのできる)行動を考え、実行すること。「臆病な批評家であるよりはハングリーなバカ者であれ」とスティーブ・ジョブスの言葉にある。自分は今まで臆病な批評家であったと思う。自分としてどう思うのか、どう評価するのか、どう行動するのかということを常に考えながら行動したい。

〈もっと多くの生徒の声を載せたかったのですが紙幅に余裕がありません。「第2回地球村」の開催を期待して下さい。そして参加して下さい〉

